

幼児の器楽指導について

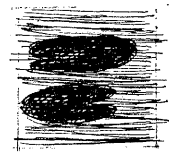
酒田 富治

毎日の保育に

あらためて言うまでもないことですが、幼児の器楽あそびは、音楽教育の一つの経験領域であって、毎日の保育でおこなわれるのが本筋です。

たしかに近頃はリズム合奏は盛んになってきました。どこの幼稚園でもリズム楽器の一揃いは備わっていないところはないといってもよい程の普及振ります。しかし、それでいて、これを指導する先生がたにとしては、まだ何となく器楽あそびは「よそ行き」の感じではないでしょうか。

お誕生会や、クリスマスや、お雛祭りのステージには、欠くことの出来ないプログラムの一つとまでなっているが、さて、毎日の保育の場においては、気安く、安易に、器楽あそびをしているのは案外少ないのではないのでしょうか。歌や遊戯や紙芝居や折紙などを



指導するときと比べてどうでしょう。抵抗、とまでいかなくても、まだ何となく気楽な気持でとりかかれぬものがあるのではないのでしょうか。

これにはいろいろな理由があらうと思います。が、中でも最も大きい理由は、器楽合奏という、ステージで演奏されるような大がかりなものでなければならぬ、という觀念にとらわれていることにあるのではないのでしょうか。リズム楽器が保育界にとり入れられてからの年数がそう古くないことや、各楽器の取り扱いや指導についての先生方の経験が浅いことなどを考えると無理もないとはいえますが、何しろリズム合奏の華やかな面が特に目立つので、演奏面への目が向けられて、毎日の保育にどう取り入れるかという問題についての研究が案外おろそかになっている結果ではないかと思われまます。歌や遊戯や紙芝居や折紙などの指導が、年に何回かしかおこなわれない特殊なステージ目当てにあるのではなく、毎日の保育

にあるのと同じように、器楽の指導もまた毎日の保育にあるのが当然であります。したがって、その為の研究工夫はもつともつとなきれてよいことだと思われまゝ。

皆の楽器あそび

よく論議の種になるものの一つに、器楽合奏は選抜した子でやるのが良いか、全体の子でもやるのが良いか、という問題があります。たしかに音楽の場合は、合唱でも合奏でも、能力の低いものがある、演奏効果はマイナスになります。たったひとりの調子外れがいた為に、美しいハーモニーがそこなわされたり、たったひとりのリズム音痴の為に合奏がぶちこわしになるという例は珍らしくありません。ですから演奏効果、即ち上手に演奏するということだけに重点をおいて考えるなら、当然優秀な子どもを選んで合奏した方がよいということは明らかです。ですから、ステージの合奏とか、放送とか、コンクールなどを主として考える者には、選抜した子どもで合奏するのが当然ということになります。

しかし、幼稚園で器楽合奏をするのは、豆楽団を作ることでもなければ、また音楽家の卵を養成する為でもありません。それは人間教育の一要素としての音楽教育をよりよくおこなうためのものであり、そうした教育を通して豊かな人間性を育むためであります。ですから、合奏が限られた子どもだけの専有物になることは、幼稚園

教育の目的に反するということになりましよう。楽器を鳴らしたいという欲求はすべての幼児がもっている一般的な欲求です。或る子どもにはあらわれ、或る子どもには現れないという特殊現象ではありません。幼稚園教育に楽器あそびが取り上げられたのも、要するにそうした欲求が一般的現象であり、これを課すことによつて音楽教育の効果を高め、人間教育にプラスするという考え方にほかなりません。ですからこの点からも、選手的な考え方は妥当でないということも容易にうなずかれます。選手制の考え方は、要するに上手な演奏、という点にウエイトのかかったもので、上手な演奏は程度の高いことを意味し、程度の高いのはその教育程度の高いことを現わす、という一連のつながりに基づいているのではないのでしょうか。上手ということ、教育程度が高いということは必ずしも一致するとはいられません。豆楽団養成なら別ですが……。しかしかりに一步ゆずって一致するとしても、それが毎日の保育において全体の子どもを対象として指導され、その結果として自然に上手になったというのなら、たいへん結構なことですが、優秀な子どもだけを選抜して特別に練習した結果が上手であったとしても、それは全体の子どものレベルでないという点において、幼稚園教育としての教育評価の対象にはなりません。問題は全体の子どもです。幼稚園教育の本来の姿からみて、上手下手ということよりも、むしろ毎日の保育にどのように指導され、全体の子どもの音楽生活がどのよ

うに深められているかという点が大切なところです。

楽しい楽器あそび

もう一つの問題は、演奏する曲の易しい難かしいということである。そしてそれが程度の高い低いということと関連して考えられていることである。

いろいろな楽器を用い、複雑な編曲をした長い曲を合奏すると程度が高いといわれ、簡単な編曲のものを合奏すると程度が低いと評されるのが一般のようです。大体において難かしい合奏を手がけるのは器楽指導に熱心な先生に多いようです。その熱意と努力には頭が下がりますが、しかし相手は幼児であり、教育の場合は幼稚園であるということをお忘れてはならぬと思います。勿論、毎日の保育における器楽指導の当然の結果として、第三者には難かしく見えても、その子どもたちにとっては案々とこなされている場合は何も問題はありません。しかしその曲を演奏するために、特に優秀な子どもを選んでは、その上長い時間をかけて特別な練習をしなければならなかったとしたらどうでしょう。これは相当考えねばならぬ問題ではないでしょうか。難かしい曲を演奏するということが、程度が高いということとは別個の問題です。また程度の高い曲を演奏するということが、幼稚園教育の本質とはこれまた別問題です。演奏ということ（ステージとか放送とかコンクールとか）に重点をおいた考え方の

指導者には往々こうした弊に陥る傾向があるようです。しかしこの点は幼稚園教育の本質からみて大いに考えねばならぬところです。毎日の保育に重点をおいて考えるならば、一曲を仕上げるのに何ヵ月もかかるような難曲を手がけることは、全く無意味な骨折りということになりましょう。

毎日の保育において、全体の子どもを対象にして考えるならば、当然どの子どもにも無理のない合奏ということが考えられますし、また、その日その日の指導目標によって、楽器あそびのいろいろな形が考案されるはずである。そして楽しいあそびの中に、いろいろなリズム型や、音色の変化や組み合わせ、合奏の美しさや楽しさなどが経験されていくことである。子どもの程度に応じた合奏曲で、いろいろなリズム型を、いろいろな合奏形態の中で楽しく経験させるいき方と、難曲と取り組んで、先生も子どももフーフィーっている姿と比べて、何れが幼稚園教育のほんとうの姿でしょうか。

創造のよろこびを

教室やステージで子どもたちがいろいろな楽器をもって、先生のピアノに合わせて合奏する姿は全く可愛いものです。鮮やかにやってのけると、思わず拍手の讃辞を送ってしまいますが、その後で、フトこの子どもたちはどのような指導を受けて、これまでになつたのかと考えさせられることがたびたびです。いわゆる豆楽士で、合奏

を聞かせることを職業としている子どもたちなら問題は別です。しかし、人格形成への音楽教育という立場を考えますと、上手ということだけで無条件に喜んでおられぬものがあるからです。もし子どもたちが、先生によって編曲された合奏譜を、忠実に一条乱れず演奏することに重点を置いて指導された結果、上手に演奏出来たとしたら、果してそれによいかと疑わずにはおられません。

人間教育において最も大切なことは、教えられたことを忠実に覚え込むということではなく、更に進んで、内なるものを表現するとか、新しいものを創り出すとかいう、いわゆる創造性を培うことであります。芸術が教育に寄与する面が大きいというのは、美的情操の陶冶は勿論ですが、同時に、この創造性の培養への寄与にあると思います。音楽教育においても、当然この問題は考えられねばなりません。音楽教育において、この問題はあまり考えられませんが、遺憾ながら従来はこの問題はあまり考えられませんでしたし、また指導もされていなかったようです。とかく演奏面にのみ重点がおかれ、歌でも合奏でも、どのように上手に演奏させるか、という点に最大の関心が払われ、指導法の研究もまたこの点に集中していた、といった過言ではないというのが実情でした。しかし、こうした状態は改めねばなりません。猿が芸を仕込まれるように、仕込まれる音楽教育から、子どもたちの躍動する生命表現への創造の音楽教育へ……。

創造教育という、音楽ではすぐ作曲というふうには考えられがち

です。そして音楽経験の浅い幼児にとって、作曲は無理であるという議論に展開されがちですが、しかし創造とは必ずしも作曲だけではありません。勿論作曲も含まれますが、その領域はもっと広く音楽に反応する幼児のいろいろな姿や、音楽的表現の一切を意味します。例えば、音楽を聞いて、自由に、思いのままに——誰かに教えられた型でなく——手足を動かしたり、歩いたり、踊ったりすることや、またタンブリンやカスタネットを自由に思いのままに打ったりすることをも指します。これらの現象は全く自発的なものであり、自由な表現活動であります。そしてどの子どもにも見受けられる一般的現象であり、幼稚園時代の子どもは勿論、それ以前から既に現われている姿であります。ですから、音楽をきいて自由に「おどる」ことと、自由に「楽器のリズム打ち」をすることは、幼児期の音楽教育において、創造性を培う最も良い「場」であるといえます。

こうみてくると、幼児の音楽指導においてはどのように上手に演奏させるかということにのみ専念するより、むしろこの芽生えている創造性をどのように取り上げ、どのように伸ばすかということに重点がおかれねばなりません。この点こそ幼児の音楽指導における最も大きな教育的意義であり、今後の大きな課題であるといえます。

（酒田音楽教育研究所・都立保母学院講師）